

飛鳥 ASUKA KAWARABAN かわら版

2026年
8月

夏空号

第220号

発行所 株式会社 飛鳥 出版室

発行人 永野 正将

ADD: 〒780-0945 高知市本宮町65-6

TEL: 088-850-0588

MAIL: info@asuka-net.jp



表紙写真 朝峯神社の風鈴：株式会社 飛鳥

もくじ

日本からの眺め⑨	氏原名美	02
新聞余話⑩	大澤重人	03
おのころま奮染記38	田島征彦	04
子どもの巣立ち		05

オリジナル商品出品報告	06
飛鳥広告	07
さもないこと⑪	永野雅子 08

日本からの眺め⑨

今は昔の通信事情

氏原 名美

キルギスの元教え子でもある大学の同僚からスマホにメッセージが届いた。「先生、いま電話してもいいですか？」とある。用件をメールに認めるより電話のほうが手っ取り早いと判断したのである。すぐにかけてきたりしないですぐ伺いを立てるのは、相手の都合を聞いてからという配慮があつてのこと。もともと、私のスマホは持ち主と行動を共にしない「不携帯」だから、「いま」をとづくに過ぎてから「ごめん、何かあつた？」と返した次第。通信費無料のアプリが日本とキルギスを声でつないでくれる。何とも便利になつたものだ。

二十数年前のキルギスでは、自宅に電話を引こうと回線の設置を申し込んでも何年も待たされるといふ状態だった。私のアパートには電話がつながつていたので、休みの日に学生たちが集まると、「先生、電話使ってもいいですか」と、次から次

へ頼んでくる。そして必ず「ビシケクだけにかけます」と付け加える。有料の市外にかけたりはしない、何分かけても無料の市内通話だから安心してくださ、という意味だ。

日本でも我々世代が子供だった頃は電話のある家は少なく、近所のお店がかかつてきた電話を取り継いでくれたものだ、といううな話をしていたら、一人の学生が「電話はないと不便ですが、あつても困ります。お客さんを大勢呼ぶ度に、両親は電話料金を心配します」と言う。

よくよく聞いてみれば、訪れた客の何人かがキルギス中の親類縁者に電話するので翌月はかなりの額の支払いを覚悟しなければならぬらしい。「こちらが招いたお客ですから電話も自由に使ってもらいます。でも父は、国際電話の回線だけは契約から外しました」と、キルギスらしいおもてなしを心がけながら、それなりの対策は講じているようだった。

それからわずか二、三年、キルギスではあつという間に携帯電話が普及した。携帯本体の価格が当時の給与所得者の平均月収に匹敵するというのに、一人に

一台と言つていいほど誰もがプリペイド式の携帯を持つようになった。それとともに増えたのがワン切り。「チャージ残高が少ないのでそつちから電話して」という合図だ。それに応えなくても「何で無視するんだ！」などと腹を立てたりはしない。「手持ち不如意はお互い様」の暗黙の了解があつて、日本のような、「既読スルー」に憤慨する狭量さはなかったように思う。そうこうするうちスマホが世に溢れ、通話と短いメッセージの送受信しかできない携帯はお役御免となつた。

いまやスマホに通信費無料のアプリをインストールしておけば、インターネットが通じる環境ならどこでも音声通話もビデオ通話も可能になつた。だから、キルギスの親類からはしょっちゅう電話がくるし、我が家の世帯主は仕事で日に何度も海外とやり取りしている。留学生たちもいつでも故郷の家族と話せるおかげでホームシックから早く抜け出せるようになったとしたら、無料アプリさまさまだ。

学生時代、親元には仕送りしてもらつた分の使途明細を添えて月に一度は近況報告の手紙は出していたが、当時は北海道か

ら高知への通話料金が今では想像できないほど高かつたから、こちらから電話する気にはならなかつた。それでも、たまには声を聞かせると言われるので、数か月に一度は学生アパートのピンク電話から実家に電話した。

通話料が四割引になる午後八時過ぎ、受話器をあげて十円硬貨を一枚投入し、ダイヤルする。つながったら「もしもし私、電話ください」とだけ言つて切る。すると、すぐさま母が折り返してくる。もちろん長話はしない。文字通り声を聞かせて終わるのが常だった。

あの頃はまだテレホンカードというものがなかつた。もしあつたとしたら、帰省のたびに母からきつと何枚も持たされていたにちがいない。母にとって声でつながるといふのは特別な何かだったのだと、今にして思う。

氏原 名美

うじはら・なみ

ビシケク国立大学（キルギス共和国）名誉教授、越知町出身。
北海道大学卒。



ビシケク市街からアラトー山脈を望む（写真：Saijo Y.）

会見で記者は闘って



時の総理が、記者会見をやりたがりません。

いや、やってるよ——。

形だけの「会見」は、会見とは言いません。5月25日

の会見はわずか8分。しかも、記者クラブの窓口である幹事社のみがまとめて聞く形で行われました。幹事社の機転?で、全社で一度だけ質問するよう要請があったことが暴露されました。

あなたが会見する側なら、自分の仕事ぶりを効果あるものと世間に伝えたいと願うでしょう。不備を突かれたり、批判されたりしたくありません。そのためには、会見時間を短くし（架空の公務をでっち上げ、それを口実に早めに切り上げます）、うるさ型の記者は当たらないようにし（クラブに所属していない記者は参加させません）、感染症予防などを口実に人数を制限し、幹事社には何を質問するの

か事前に聞いただし、想定問答を用意します。質問とかみ合っていないなくても、一度答えたという体裁を整えたら、追加で追及すること認めません。

姑息なあの手この手で記者側を縛っているのに、現総理は、歴代稀に見るほど会見から逃げ回っています（国会にも出たがりません）。高い支持率を誇っているはずなのに、よほど都合の悪いことでもあるのでしょうか。トランプ米大統領は全く支持しませんが、記者会見やぶら下がり取材（移動中などに記者が取り囲んで聞くこと）にこまめに応じているその姿勢だけは唯一評価できます。先進国の政治家のあるべき姿です。

なぜ記者会見が大切なのか。記者が偉いのではなく、記者の背中にはあなたがいるからです。国民の負託を受けて公務を遂行している以上、権力者は国民の疑問に答える責務があるのです。国民が知りたいことを、便宜上、記者が成り代わって権力者に聞いたです場なのです。

首相は忙しい身だから配慮しないと▽SNSで逐一発信しているよ——。

いや、国民への説明は、権力者の1丁目1番地です。SNSはすべての国民が使っているわけではないし、言いたいことを一方通行で伝えるだけでは、単なるPRです。

購読している新聞に、こうした首相の姿勢を問題視する記事が載りました。それ自体は評価できますが、記事の末尾に署名がなかったことに新聞社側の及び腰を感じました。暴力団や特殊な新興宗教の記事は無署名にすることが多いのですが、官邸もそうした団体並みなのでしょうか。もっとと嘆かわしいのは公共放送です。看板の定時ニュースが現政権の単なる広報番組と化しています。

会見は真剣勝負の場。記者にはもつと闘ってほしい。

1972年6月17日、佐藤栄作首相が退陣表明をする会見で、こう口走りました。

「僕は国民に直接、話をしたい。新聞になると違うんだ。偏向的な新聞は大嫌いなんだ」

これを聞いた記者たちは抗議の意を込め、会見場から一斉に立ち去りました。首相は空席のイスに

話し続けるしかありませんでした。首相側の思う壺^{つぼ}だったとの見方もありますが、記者側がへりくだったような現在のぬるい会見とは大違いでした。闘う記者がいれば、その背中を支えるのがわたしたちです。



空席に語る退陣表明（イラストは、写真をもとに生成AIで作成）



大澤 重人

おおざわ・しげと

渡来入歴史館（大津市）
専門員、元毎日新聞高
知支局長

新刊『裸足で越えた三八度線——「死滅の村」からの引き揚げ』、今は満洲からの引き揚げ者取材中。

おのころじま 大奮 染木記

ふんせんき

38.「じごくのそうべえ」ものがたり

じごくばっけいもうじゃのたわむれ

③「地獄八景亡者戯」

田島 征彦

しています。多分、米朝師匠の創作も入っているのでしょう。もちろん落語は大人の笑いですので、子どもたちの世界へは通じにくいことが多いのですが、米朝流の語り口のうまさ、面白さが、一時間を爆笑の渦に巻き込むのです。テキスト（文）も内容も、そのままでは絵本になりません。

落語は噺家の話芸が、笑いや人情を伝えます。絵本は絵が、笑いも感動も伝えるのです。

ぼくは、この噺の持つ爆笑を絵本に込めようと思いました。

アトリエで、

古典落語は、どれも誰が、いつ作ったのかわからない噺ばかりです。だから落語には著作権がないと言われています。

この落語は、すみのや、かしくという、京都に住む引退した落語家の持ちネタでした。それを桂米朝師匠が、大阪から京都へ何度も通って、くち伝えて覚えたと言われています。

内容は、昔話にある軽業師（または手品師）と、医者と山伏などが、地獄へ落ちるが、協力して、大あばれするような話です。

この落語は、一時間もある長い噺で、地獄の様子を、面白く描写

ろん、自分で噺せるほど、噺は頭にはいつてきています。

子どもたちに解る笑いに変えていけそうに思ったのは、一年ほど過ぎていました。心の中では、子どもたちと大笑いしている自分を想像できるほど、絵本は立ち上がってきました。

ラフな絵と、短いテキストが出来上がっていました。

あれから、一年が経った春です。出版社へ電話すると、すぐに編集者が女性二人と、呑気そうにやってきました。

「もう、わらびやせんまいは、

出てますか」彼等は、全く遊び気分です。しかしぼくは、この絵本が、子どもたちが爆笑する絵本に、生まれ変わったのを見てもらいたいのです。

「こんな楽しい絵本は、まだこの世にはない！ 凄い絵本が、この落語から生まれたことを、見て下



田島 征彦

たじま・ゆきひこ

染色家・絵本作家

さい！この絵本の編集者として、君は百年も二百年も名前が残ることになるよ。このテープ聞いて、ダミー絵を見てよー。」

ぼくは一年間の成果に驚く編集者たちを想像していました。

「せっかく、天気がいよいよ、ぼくらは、わらびをとってきます。テープと、ダミーは先生がおひとりで、聞いていて下さいよ」

鼻先で笑っている男をながくつてしまうのをぼくはこらえて、「この絵本はお前の会社からは出さずもんかー！」（つぶき）

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年「じごくのそうべえ」で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年「ふしぎなともだち」で第二十回日本絵本大賞。沖繩の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖繩戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本「なきむしせいとく」が二〇二三年度の講談社絵本賞を受賞した他、国際的な評価を受けました。2026年には対馬丸事件を「ガージュール先生」という絵本に完成しました。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

子どもの巣立ち

経理・永野



わが家には3人の娘がいる。

長女は今年県外の大学を卒業し新社会人、次女は今年から大学生、三女は小学6年生。

この春、それぞれの新しい生活がはじまった。

新社会人（県外で就職）として3ヶ月がたった長女に「仕事はどう？」とたずねてみると「仕事は覚えることが山のようにあつて大変、でも職場の同僚や先輩たちがとてもいい人たちばかりやき頑張れてる！」との返事。どこの職場でも大なり小なり大変なことはつきものだけど、支えてくれる仲間がいてくれることが仕事へのモチベーションにもつながると思うので、そのことを聞いてひと安心。

また、次女には小学生の頃から描き続けている夢があり、高校進学も少しでも夢へ近づいたための勉強ができる学校を選んだ。「私は高校卒業したら、高知の専門学校

行つてずっと家におるき、よろしくねー」なんて話していたが、高2の夏頃「県外の大学でもっと専門的な知識を身につけたいいき、大学へ進学させてもらえんろうか」といつてきた。悩みはしたけど、

子どもが学びたい意欲があるなら親として全力で応援しようと思を決し、その後は本人の頑張りもあつて希望の大学へ合格することができた。

3月、長女の大学卒業式と次女の引越しの日が重なつてしまつた。前日に次女の引越し荷物を車に詰め込み4人で長女宅へ。卒業式への出席はできなかったものの娘の華やかな格姿を目にし、感慨ひとしお。

そして余韻に浸る間もなく、つぎに向かうは次女の引越し先。次女は小さい頃からわが家のムードメーカー的存在で、車内も笑いが絶えない。本州に架かる橋を渡つ

ている時、ふと「帰りは3人か」と頭をよぎる。家に着くと頼んでおいた家具や電化製品が次々と届く。次女の家に滞在できるのは3日間、その間に家具の組み立てやら、生活用品の買い出しなどのでゆつくりする余裕もなく、あつという間に過ぎていつた。

最終日、それなりに生活ができる部屋になり娘も大満足。「じゃ、帰るね！頑張りよ!!」と家の前でお別れ。娘の姿が見えなくなるまで手を振つた。やつぱりさびしい。

帰りの車中ではひっそりかと思いきや、おしゃべり好き三女の一人漫談を聞きながら高知へと帰つてきた。その日の晩のこと、次女から慌てた電話、早速ハプニングが起きたことでした(笑)。

.....

同じ親から生まれてきても3人の性格も三者三様。同じように育ててもそれぞれの個性があるから面白い。子育ては、親にとつても勉強であり、子どもから学ばせてもらうことも多い。

二十数年前に弊社から出版された『こども』という本がある。元保育士のはまだまささん著で、

0歳から5歳までの子どもの気持ちをかわいイラストとともに一言ずつ添えられている。

そのなかで「片親だけで育とうと、沢山の人の中で育とうと、子どもにとっては関係ない、必要なのは愛情豊かに育つこと」とある。

たしかに、愛情をたくさんもらつて育つた子ほど感情豊かで他人の気持ちに寄り添うことのできる子になるのではないかなと思ふ。いま読み返しても、うなずけることばかりで子育てのヒントがたくさんつまっている。

親が子を思う気持ちに終わりは無いのだけれど、ひとまず子育ても終盤戦に差し掛かつてきて思うこと、子育ては楽しいことや苦勞も多いけど振り返ればあつという間。子どもと一緒に過ごせる今を大切にしたい。



『こども』

著者：はまだまさよ
B6変型 96頁
税込価格：838円

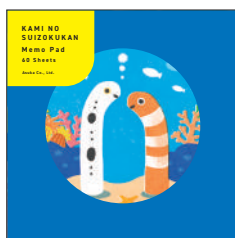


トサコレ! 『紙と印刷・夏の水族館』と ペーパーサミットジャパン2026で オリジナル商品を出品しました!

高知県印刷工業組合青年会に所属する県内の印刷会社が合同で出展し、弊社もその一員としてオリジナル商品を出品させていただきました!



今回は「水族館」をテーマに商品を作りました。



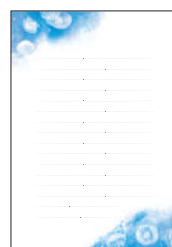
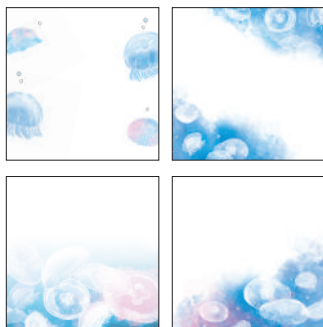
水族館で人気のチンアナゴをメモ帳にしました。パネルも可愛いと評判でした!



従業員のお子さんが描いたイラストをメッセージカードと封筒にしました。イカ柄が好評でした!

イベント用に
制作した分は
完売しました

透け感が涼し
げなトレーシ
ングペーパー
のメッセージ
パッドです。



クラゲがゆったりと漂う幻想的なレターセット。
トレーシングの封筒とセットで販売しました!

イベントでご購入いただいた皆さま、誠にありがとうございました。実際に売り場に立ち、お客様や関係者の皆さまから直接ご意見を伺うことができ、学びを得る貴重な機会となりました。また、今回の出店にあたり、他の印刷会社の皆さまにも大変お世話になりましたありがとうございます!

今回制作した商品は、弊社でも販売しております。
ぜひお気軽にお問い合わせ・お声がけください!

Sustainable Development Goals

私たち、株式会社 飛鳥は SDGs(持続可能な開発目標)に 取り組んでいます。



■ SDGs宣言書



弊社の「SDGs 宣言」に対して認定書をいただきました！

■ 実質再生可能エネルギー100%電力



弊社の使用する電力は「再生可能エネルギー指定の非化石証明書の使用により、実質的に再生可能エネルギー 100%」の電力の契約となっております。

■ 環境保全活動『Green Graphic Project』参加



富士フィルム環境保全活動『Green Graphic Project (GGP)』に参加し、「カーボン・オフセット証書」を発行されました。

当社は、2017 年より富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ株式会社様の CTP を使用し、2022 年の CO₂ 削減量は 7,421kg となりました。
(2021年 6,286kg、2020年 8,549kg、2019年 9,329kg)

■ 中小企業家同友会全国協議会 同友エコ奨励賞



■ 経済産業省中小企業庁「事業継続力強化計画」認定



七、もたないこと

11

ある日突然！

永野 雅子

歳の割には元氣だと自我共に認めていた私が、ある日突然、何かに掴まらないと歩けなくなった。特に階段の上がり降りは手摺りの支えがないと進めない。部屋の中を杖をついて歩く姿に息子曰く、

「まるでおばあさんやねえ」「まるでじゃなくて、私はおばあさんです！」

病院に行くと、レントゲンやMRIを撮った結果、「股関節にダメージがあります。加齢によるものですが様子を見て手術を勧めます」とのこと。医師から詳しい説明と入院の期間などをお聞きしても、「家族に相談します」と言うのがやっと。

何はともあれ、悪くなったものは修理をしなければ日常は帰ってこない。ただ、入院期間が二ヶ月となると考え込んでしま

う。私が担当している仕事や、所属する団体の役目もあり、その調整をどうしようとなる。

息子たちに報告すると、早速スマホで調べ始めた。そして家族のライングループに「雅子股関節」なる項目を作って、毎日のようにあらゆる情報を流し込んでくる。変形性股関節とは、手術の方法、入院期間、神の手を持つ医師の存在、それも全国区。

いくら良い条件が揃っていても遠い県外に行けるわけないでしょう？また、医学用語が満載の記事を「これ、読んで。あれ見た？」

画面には小さい文字で専門的な解説や図形、写真入りの説明まであって、いちいち拡大しないと読めないし、また読んでも頭に入っていない。この膨大な情報が瞬時に入手

出来る機能に驚きとともにお手上げ状態。もう、どうにでもしてくださいの心境。

次の診察には息子と嫁が同席すると言う。ありがたい思いと同時に、素人がスマホで得た知識で先生に色々質問するなんて失礼じゃない？という気持ちで逡巡していると、息子曰く、「今の時代、普通のこと」と、にべもない。

そこまで言うならと観念して病院へ。「セカンドオピニオンを希望します」というと、気持ちよく、紹介状を書いてくださるとのこと。時代とは言え、お医者様も大変ですね。結局、入院期間が短い方を取る形で決まった。

手術までの間に筋肉を鍛える運動を指導されたけれど、やるのがいっぱいある中で、思うように体が動かないことへの苛立ちと、酷暑と言われる暑さをしのぐ日々を過ごすだけで精一杯。

そんな中、パソコンや諸々の荷物を持って出社すると、「持ちましょう」と言って二階まで運んでくれる社員や「無理せん

とってくださいよ」などと優しい言葉をかけてくれる皆さんの思いやりに励まされる。

友人や知人から、手術をしたらすっかり良くなって動き回っている方の例を知らせてもらって、秋には散歩もできるかなと希望が持てるようになった。

八十路を越えて、少しスローライフを心がけるチャンスかもしれないと、良い意味で前向きに捉えようと思うこの頃である。



永野 雅子
ながの まさこ
株式会社飛鳥
常務取締役
著書「わが家の太郎」



「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援しています。

飛鳥かわら版 第220号【夏空号】 飛鳥出版室

●発行所：株式会社 飛鳥 ●発行人 永野 正将
●住所：〒780-0945 高知市本宮町65-6 ●電話：088-850-0588
●メール：info@asuka-net.jp ●ホームページ：https://www.asuka-net.jp